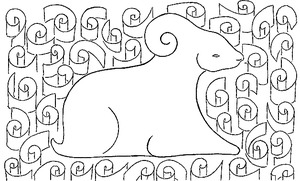
**（日曜に想う）「言葉」に逆襲される首相　編集委員・福島申二**

2020年5月24日 5時00分

[[](https://digital.asahi.com/articles/photo/AS20200524000139.html)「亡羊（ぼうよう）の嘆（たん）」　絵・皆川明](https://digital.asahi.com/articles/photo/AS20200524000139.html)

　本腰を入れたものより、戯れのようにやっていたものの方が後世に残ることがある。たとえば[久保田万太郎](http://www.asahi.com/topics/word/%E4%B9%85%E4%BF%9D%E7%94%B0%E4%B8%87%E5%A4%AA%E9%83%8E.html)は本業の戯曲や小説より、「余技」だと言っていた俳句によって今はよく知られる。〈湯豆腐やいのちのはてのうすあかり〉

[アベノミクス](http://www.asahi.com/topics/word/%E3%82%A2%E3%83%99%E3%83%8E%E3%83%9F%E3%82%AF%E3%82%B9.html)よりもアベノマスクの方が後々、人の記憶に残るように思う。片や長期政権の屋台骨をなす[経済政策](http://www.asahi.com/topics/word/%E7%B5%8C%E6%B8%88%E6%94%BF%E7%AD%96.html)であり、もう一方は側近官僚の思いつきとされる。だが巷（ちまた）の秀逸なネーミングも相まって、冗談めいた奇策と、首相ご当人の着装の印象はなかなかシュールだ。

　むろん万太郎の句はすぐれているから名が残るのであり、不人気なマスクとは逆の話。ともあれ窮屈なマスク顔で、あるいはマスクを外して、[安倍晋三首相](http://www.asahi.com/topics/word/%E5%AE%89%E5%80%8D%E6%99%8B%E4%B8%89.html)は様々に語りかける。しかし言葉が心に響いたという話はあまり聞かない。

　言葉を弾丸にたとえるなら、信用は火薬だと言ったのは、作家の徳冨蘆花（ろか）だった。火薬がなければ弾は透（とお）らない、つまり言葉は届かない、と。数を頼んで言葉への横着を重ねてきた首相に、もはや十分な火薬があるとは思われない。弾も自前ではなく大抵は官僚の代筆である。

　丁寧、謙虚、真摯（しんし）、寄り添う、といった言葉をさんざん「虐待」してきたのはご承知のとおりだ。いま、危機のときに言葉が国民に届かず、ひいては指導力が足りないと不満を呼ぶ流れは、言葉に不誠実だった首相が、ここにきて言葉から逆襲されている図にも見えてくる。

　　　　　＊

　１年前、[元号](http://www.asahi.com/topics/word/%E6%96%B0%E5%85%83%E5%8F%B7.html)は令和に替わった。選考の過程で、国書を典拠にしたかった[安倍首相](http://www.asahi.com/topics/word/%E5%AE%89%E5%80%8D%E6%99%8B%E4%B8%89.html)は「[万葉集](http://www.asahi.com/topics/word/%E4%B8%87%E8%91%89%E9%9B%86.html)っていいね」と語ったという。令和の出典と同じ[万葉集](http://www.asahi.com/topics/word/%E4%B8%87%E8%91%89%E9%9B%86.html)の巻五には「大和の国は……言霊（ことだま）の幸（さきわ）う国」という名高い詩句がある。言葉に宿るゆたかな力で栄える国、という意味だ。

　万葉の昔から時は流れて、政体は民主主義へと変遷した。民主政治は血統や腕力ではなく言葉で行われる。リーダーを任ずる者なら、自分の言葉を磨き上げる意欲を持ってしかるべきだろう。

　ところが首相には、言葉で合意をつくったり、人を動かそうとしたりする印象がない。数で押し、身内で仕切れば言葉はもはや大事ではなくなるのか。国会では早口の棒読みか不規則発言。スピーチなどは「国民の皆様」と慇懃（いんぎん）だが、中身は常套句（じょうとうく）の連結が目立ち、「言霊」を思わせる重み、深みは感じられない。

　作家の故・[丸谷才一](http://www.asahi.com/topics/word/%E4%B8%B8%E8%B0%B7%E6%89%8D%E4%B8%80.html)さんが１４年前、安倍氏が最初に首相に就いたときに、新著「[美しい国へ](http://www.asahi.com/topics/word/%E7%BE%8E%E3%81%97%E3%81%84%E5%9B%BD%E3%81%B8.html)」の読後感を本紙で述べていた。「一体に言いはぐらかしの多い人で、そうしているうちに話が別のことに移る。これは言質を取られまいとする慎重さよりも、言うべきことが乏しいせいではないかと心配になった」

　辛口の批評だが、老練な作家の洞察力は、後に多くの人が気づく「首相の言葉の本質」をぴたりと言い当てている。

　　　　　＊

　家ごもりの一日、版元から頂戴（ちょうだい）していた梶谷和恵さんの詩集を手に取った。巻頭に置かれた「朝やけ」と題する３行の短詩に、いきなり引き込まれた。

　　どうしよう、

　　泣けてきた。

　　昨日は　続いている。

　明けゆく空を見て湧く[感動](http://www.asahi.com/topics/word/%E6%84%9F%E5%8B%95.html)とも、昨日をリセットできない屈託とも読める。

　後者と想像すれば、今の多くの人の心情を表しているかのようだ。コロナ禍の[緊急事態宣言](http://www.asahi.com/topics/word/%E7%B7%8A%E6%80%A5%E4%BA%8B%E6%85%8B%E5%AE%A3%E8%A8%80.html)が解除されても翌日すべてが変わるわけではない。長期休校が続く子、収入の絶えた人、資金繰りに悩む経営者――誰もが事情を抱えながら閉塞（へいそく）感のなかで次の朝を迎えている。第２波への恐れも社会を陰らせている。

　そうした状況に向けて、首相は強い言葉をよく繰り返す。「躊躇（ちゅうちょ）なく」は連発ぎみだし、ほかにも「積極果断な」「間髪を入れず」「一気呵成（かせい）に」など色々ある。「力の言葉」を、「言葉の力」だと勘違いしてはいないか。

　川を渡る途中で馬を替えるな、は危機を乗り切る常道だ。しかし「コロナ後」という時代の創出は、新しいリーダーを早く選び出すかどうかの選択から始まろう。すべては民意にゆだねられる。